

Elementary Archaeological Report

てらこや埋文

平成26年
春号

緊急発表！「季刊」はきっぱり諦めます

当館には、かつて『山口大学埋蔵文化財資料館だより』という季刊広報誌が存在しました。昭和63年(1988)7月に創刊し、以降平成5年(1993)11月号(秋号)をもって惜しまれつつ廃刊となつた広報誌でしたが、新たな季刊広報誌として復刊させたのがこの『山口大学埋蔵文化財資料館通信 てらこや埋文』となります。本誌は平成17年(2005)8月(夏号)に始まり、順調に季刊としての刊行を重ね、平成22年(2010)3月に刊行した20号(春号)までは胸を張つて「わたくし、季刊でございましから」と言える状態にありました。ところが平成22年度以降、年度末に「春夏秋冬特大号」と称して8頁の広報誌を刊行することが常態化し、今年度で4年目を迎えることに。はっきり申し上げますと、こんなの、ぜんぜん「季刊」じゃない！

実を申しますと、平成22年度以降、構内遺跡の発掘調査、発掘調査成果と館活動の概要を収録した年報の刊行、構内遺跡出土品や収蔵資料を用いた企画展示、市民を対象とした公開授業という習慣的な業務の他に、当館は新たな取り組みを開始しました。一つは館蔵品の調査研究報告書の刊行、そして大学博物館連携事業(後に発展解消し山口県大学ML(ミュージアム・ライブラリー)連携事業となる)です。これら誕生したばかりの新たな取り組みに重点的に取り組んだため、季刊での広報誌の刊行は諦めざるを得ませんでした。そう、季刊で刊行できなかったのは、偏に当館が充実した業務を行つていたからなのです。言い訳がましい？ ぜんぜん「言い訳」じゃない！とは言え本誌に楽しみにしてくれている稀少読者の方々にお詫び申し上げると同時に、ここに宣言いたします。「季刊」の看板を今号より下ろします。

年1回の大切な誌面をやや無駄に使つてしまつたが、今年度実施した当館の発掘調査と展示活動を以下に紹介します。

平成25年度に実施した発掘調査

①(白石遺跡) 教育学部附属山口中学校武道場

新営工事に伴う予備発掘調査

山口市白石1丁目9-1に所在する教育学部附属山口中学校の校庭南部に武道場が建設されることとなったため、平成25年6月3日から18日にかけて、計画予定地(544m²)を対象に予備発掘調査を行いました(調査面積235m²)。

調査によって確認された層序は、第1層：表土(層厚約5～7cm)、第2層：造成土(層厚約70～100cm)、第3層：旧水田耕土(層厚約6～16cm)、第4層：旧水田床土(層厚約2～8cm)、第5層：遺物包含層(層厚65cm以上)です。この内、第5層の遺物包含層からは15世紀から16世紀にかけての土師器、瓦質土器等が発見されました。出土量は少なかったものの、周辺域に室町時代の集落跡が存在する可能性が高まりました。

②(吉田遺跡) 獣医学国際教育研究センター新営

工事に伴う本発掘調査

吉田キャンパス連合獣医学研究棟の東側駐車場敷地に獣医学国際教育研究センターが建設されることを受け、建設予定地全域(約608m²)を対象に発掘調査を行うことになりました。

平成4年(1992)に実施した、建設予定地西に隣接する連合獣医学研究棟新営に伴う発掘調査では、縄文時代の遺物を含む河川跡の西側肩部が確認されており、今回の調査では東側肩部の検出が予想されました。



山口中学武道場新営工事に伴う予備発掘調査風景

獣医学国際教育研究センター新営工事に伴う本発掘調査にて
検出された河川跡・白線が河川の肩部(西から)

調査は平成 25 年 8 月 5 日より着手しました。駐車場のアスファルトを除去後、造成土を重機にて掘削・その後、調査区壁面に沿って排水および土層断面確認用の側溝を人力にて掘り始めたのですが、平成 25 年の夏は予想以上に猛暑日が続きました。連日 35 度を超え、外気は 45 度に到達。私をはじめ多少の暑さなら苦にしないメンバーでの調査だったのですが、急速農業用の遮光ネットを導入。それでも暑さに耐えきれず、さらに扇風機を複数台導入。そこまで対処しても連続 40 分の作業が限界でした。

困難な作業を乗り越え、調査区四方の土層断面を丁寧に調査したところ、調査区の北西部にて河川埋積土を確認。また、河川堆積土を掘り込む形で古代以降のものと思われる土壌が検出されました。以降、土壌の埋土と河川埋積土を慎重に掘削し、10 月 7 日に調査の終了を迎きました。

今回の調査では、河川埋積土に含まれる遺物が極めて少量であること、また西に隣接する連合獣医学研究棟の新営に伴う発掘調査で検出された河川の埋積土から縄文時代の遺物のみが出土しているのに対し、弥生時代のものと見られる土器片が複数含まれていることが判明しました。両河川の関係について、今後慎重に評価する必要が生じました。

土壌に関しては、直径約 1.2m の規模を有しています。調査区内では 1 基が確認されただけで、その性格は不明と言わざるを得ません。ただし、発見された地点が調査区北西端部であったため、関連する遺構が調査区外に広がる可能性も秘めています。遺構の所属時期に関しては、河川埋積土同様に縄文土器や弥生土器と見られる土器の小片の他、少量ですが奈良～平安時代のものと推定される須恵器や土師器の小片も出土していることから、古代以降に求めることができます。

③(吉田遺跡) 第 1 武道場耐震改修その他工事に伴う 本発掘調査

吉田キャンパスの第 1 武道場改修その他工事に伴い、陸上競技場東端部に位置する 2 棟の体育器具庫を解体し、新たに体育器具庫を建設する工事が計画されました。

過去の調査により、吉田キャンパスの教育学部から各種グラウンド（サッカー場やラグビー場など）、体育館敷地からは弥生時代の遺構や遺物が検出されていることから、開発予定全域（長軸 72.805m × 短軸 9.5m：約 692 m²）を対象に発掘調査を実施することになりました。

10 月 10 日より調査に着手し、全域を掘り進めたところ、長軸が北西～南東方向である調査区に直交するかたちで、幅約 30m の黒褐色土が検出されました。この黒色土の性格や堆積状況を確認するため、旧体育器具庫の基礎坑を利用して断ち割り（範囲を限定した深掘りのこと）を行ったところ、自然河川 2 条、人工の溝 4 条が重なり合って幅 30m に達していることが判明しました。深さは約 1m。と言うことは…掘削土量は幅 30m × 調査区幅 9.5m × 深さ 1m = 285 立方メートル。作業人数は私を含め石丸恵利子教務補佐員（当時）、作業員さん 10 名の計 12 名。埋積している土の締まり具合、そして断ち割りにて底面に木製品が良好な状態で残っていることが確認されていた（慎重な掘削が必要ということ）ため、頑張って掘削しても 1 人 1 日 0.6 立方メートルが限界と予想されます。つまり 1 日 7.2 立方メートル。 $285 \div 7.2$ は…掘るだけで 40 日！ 11 月半ばに調査終了を予定していたのですが、とても無理。ということで、学内各機関の協力を仰ぎながら、作業人員の増員、掘削土排出用の重機を導入、調査期限を 12 月末まで延長などが決定されました。あとはひたすら掘り進めるのみです。

11 月以降は新たに当館に着任した川島尚宗助教の協力もあり、その後は順調に調査が進行。御用納めの 12 月 27 日に無事終了を迎えました。



炎天下での掘削作業



河川埋土からの土器出土状況と検出された土壌
(北東から)



河川埋積土掘削風景



河川完掘状況（南から）

これら河川と溝は、最上部の埋積土から出土する遺物から弥生時代終末期から古墳時代前期までの間に完全に埋没したことが判明しています。

さて、今回検出された河川では、様々な発見がありました。調査区の北側に位置する河川1では、人為的に川底を掘り下げ、その中央に河川の向こうに沿う方向に杭が打ち込まれており、杭には樹皮を縦横に編んだ網代が敷かれ、その上に茅と見られる植物と枝葉が何層にも敷かれていました。杭の背面には横木が添えられ、さらにその背面には枝葉が10cmの厚みで敷かれています。この井堰状の施設に関しては、現在類例を調査中です。

さらに河川2では、右岸付近の川底に何十本もの杭が乱雑に打ち込まれていることを確認しました。杭は調査区のさらに西方まで続くようですが、こちらも杭の機能等、現在調査中です。

その他、河川からの導水施設と見られる溝や、小動物捕獲のための落とし穴と見られる土壙も確認しました。

最後に、今回発見された河川が機能していた年代についてご報告します。河川2は、最下層から弥生時代前期の遺物が出土することから、弥生時代前期にはすでに河道として機能しており、古墳時代前期には完全に埋没したものと考えられます。河川2に関しては、河川1から西に導水する溝が河川1の埋積土を切り込んでいることから、河川2とあまり変わらぬ時期にすでに河道として機能しており、やはり古墳時代前期には埋没したものと推定されます。注目すべきは、河川の埋没時期です。調査区の南東150～250m地点（共用棟B棟、遺跡保存公園）で発見されている弥生時代に始まる集落跡は、古墳時代の初頭に廃絶するものと推定されています。つまり、当地点で確認された河川は、集落廃絶と共に河川が放棄され、完全埋没したと考えられるのです。この事実は、弥生人が河川管理を行っていたことを示します。先史時代における環境の活用形態を知る上で非常に重要な調査成果と言えます。



河川1で検出された井堰状の杭
(杭前面を網代が覆う)



河川2の右岸付近の川底に打ち込まれた多量の杭
(中央右上)



後期展中に開催したミュージアムトークの模様
(5月18日(土) 14時～15時開催)



吉田遺跡各地で出土した
古代官衙の存在を示唆する資料群

平成25年度の展示活動

①平成24年度山口大学所蔵学術資産継承事業成果展

『宝山の一角』を共催にて開催

当館展示室にて、本学の全学委員会「山口大学所蔵学術資産継承検討委員会」主催、当館共催の事業成果展を開催しました。展示は前期・後期の2部構成で、前期展は平成25年3月2日(土)から4月25日(木)、後期展は5月7日(火)から6月28日(金)の期間で開催されました。当館は共催館として展示の構築に協力すると共に、前期展にて見島ジーコンボ古墳群第151号墳出土品を、後期展にて第154号墳出土品を展出しました。

会期中、前期展では524名、後期展では523名の方々に観覧いただきました。複数の学術分野の合同展示ですので、専門外の展示品に関する質問を受ける際は戸惑う場面が多く、適切な説明ができずにご迷惑をおかけしました。平成25年度以降、より円滑な事業運営に協力して行きたいと考えています。

②第35回企画展『遺跡調査による山口大学の原風景②

地方豪族と官衙の出現』を開催

平成24年度より開始したシリーズ企画です。このシリーズでは、時を遡りながら吉田の地の歴史環境を復元していきます。前回は吉田キャンパス(吉田遺跡)の近～中世の姿に迫りました。シリーズ第二弾となる今回は、これまでに出土している古代～古墳時代にかけての資料から、当時吉田の地がどのような役割を果たしていたのか、またこの地でどのような人々が生活を営んでいたのか等を考察しました。

展示では①鎌倉時代の吉田遺跡 ②古代の遺構に見る官衙存在の可能性 ③文字関連資料に見る官人の存在 ④服飾から見る律令制度 ⑤出土資料に見る鋳造工房の存在 ⑥官衙の由来～埴輪を持つ古墳～ の6コーナーを設け、吉田の地に官衙が存在したと推定されること、そして官衙設立の背景として、吉田の地に地方豪族が存在したと考えられることなどを解説しました。

会期は7月16日(火)から10月18日(金)でしたが、夏期休暇をはさむにもかかわらず、701名の方々に観覧いただきました。毎年8月は本学のオープンキャンパスが開催されます。今後も夏期展示はキャンパス地下に眠る埋蔵文化財をテーマとした企画にて開催したいと考えています。夏休みはぜひ山口大学埋蔵文化財資料館へ！

③平成25年度 山口県大学ML連携特別展

『博物館が繋ぐもの～遺跡を未来へ～』を開催

平成22年度に「大学博物館連携」として産声を上げた活動は、翌23年度より「山口県大学ML(ミュージアム・ライブラリー)連携事業」に発展しました。平成23・24年度に実施した山口県大学ML連携事業は、東日本大震災の復興支援事業と位置付け、当館と本学図書館、梅光学院大学博物館と図書館の4館が主催となり、梅光学院大学東北ボランティア実行委員会の協力により、山口県内の4大学を巡回する展示活動を行いました。

平成25年度は、山口県内において更に強固な連携体制を築くため、事業事務局を本学情報環境部内に設置し、各大学に参加を呼びかけました。その結果、なんと9大学12館が参加することになりました！

今年度は、10月から1月までの間に各館が開催期間を設定し、「再生」を共通テーマに、各館が所蔵する学術資料や大学の研究成果を公開する連携特別展を開催することに決定。当館は『博物館が繋ぐもの～遺跡を未来へ～』というタイトルで、11月3日(日)から翌年1月31日(金)までの期間展示を開催することになりました。

石丸恵利子教務補佐員(当時)が企画担当となり、展示では「過去の再生」「現在の再生」「過去へ&未来への再生」の3コーナーを設けることになりました。「過去の再生」では、山口県内出土の滑石製品を素材とし、製作から廃棄、再利用の状況について解説しました。「現在の再生」では、当館が所蔵する木製品や金属器にどのような保存処理方法が施されているか、また粉々の状態で出土する土器片をどのような技術で復元するかを実物資料と模型を用いて解説しました。「過去へ&未来への再生」では、キャンパス内の遺跡調査時の画像と現在の景観を対比することにより、過去から現在までの時の流れを感じていただくとともに、遺跡を未来へ保存していく意味を問いかけました。

会場では、実物資料展示の他に、県内で採取した滑石原石を触るコーナー、土器の接合作業を体験するコーナーを設置し、「見る」だけでなく「体感すること」も重視しました。

展示オープン以降1ヶ月にわたり、当館西隣接する図書館改修工事に伴い道路封鎖が行われたため、通常の秋展示に比べ入館者数は伸び悩みましたが、会期中305名の方々に観覧いただきました。

また、オープニング記念として11月3日(日)14時より図書館にて開催した「滑石勾玉づくり」ワークショップは、17時に先着50名分の素材が底をつけ、盛況の内に終了しました。ご参加いただいた皆さん、ありがとうございました。

山口県大学ML連携事業は、来年度以降も継続して行われる予定となっています。当館も山口県内の一大学博物館施設として、存在意義をアピールしたいと考えています。

(横山成己)



第35回企画展 団体見学の模様



山口県大学ML連携事業 ロゴマーク



山口県大学ML連携特別展 展示模様



勾玉づくりワークショップの模様



今年も吉田キャンパスで古代米づくりに挑戦しました！ －第13回公開授業－

山口大学埋蔵文化財資料館では、考古学や埋蔵文化財、山口大学構内遺跡の調査研究成果を地域の皆様に身近に感じていただくことを目的として平成13年度から公開授業を開催しており、今年度で13年目を迎えました。

今年度の公開授業は平成18年度から取り組んでいるテーマ、日本のお米のルーツとされる赤米を実際につくり、土器などで調理して食べてみるという内容です。授業は山口大学農学部附属農場と共に延べ4回行い、小学生以下1名、小学生7名、教育学部学生5名、一般18名、合計31名（付き添いの方含む）の皆様に参加していただきました。赤米の品種は昨年と同じ「紅吉兆」という品種（もち米）です。

6月15日－田植え－

当日は朝まで雨が降っていましたが、幸い開始時間には雨があがりました。参加者は農学部附属農場・技術職員の長砂さんに代かきをしていただいた水田に田植えをしました。田植えがはじめての方も多く、水田がぬかるむため足をとられて大変でしたが、協力して無事に終了することができました。

7月20日（土）－稲の観察と除草・土器づくり－

当日は朝から快晴に恵まれました。参加者は技術専門職員の長砂さんから水田に生える雑草（コナギ）についての説明を受け、稲とヒエの違いなどを学習し、除草を行いました。その後、実習室に戻って土器づくりに挑戦しました。短時間でしたが、参加者それぞれが古代に思いを馳せた個性的な土器ができました。

10月20日（日）－土器焼成と収穫－

まず、前回つくった土器を「覆い焼き」で焼成するため、泥窯づくりに挑戦しました。この後は収穫です。7月28日の大雨で南隣の水田西側の斜面が崩壊したため、水田に大量の水が流れ込みました。また、その後、猪が水田にたびたび侵入し、稲が倒れる被害がありました。それでも残った稲は最終的に長さ約100cmにまで成長しました。収穫は模造した石庖丁などを使い、穂摘みで行いました。しかし、水田がぬかるんでいたため、収穫は一部にとどめ、残りの収穫は農学部附属農場にお願いしました。翌日の午後、土器の大半は割れることなく焼成することができました。

11月16日（土）－脱穀・糲すり、赤米を食べる－

午前中は箸こぎ、臼と杵による糲すり、てみとザルによる選別と千歯こき、精米機による作業を体験しました。午後からはいよいよ赤米の試食です。今回も土器による炊飯と蒸米に挑戦しました。炊飯は成功しましたが、昨年同様、火力不足のためか時間内にお米を蒸すことはできませんでした。炊飯した赤米は歯ごたえがあるものの美味しく甘みがありました。おかげには朴葉焼き、豚汁、あさりのすまし汁をつくりましたが、これらも美味しく好評でした。このほか、火おこしにも挑戦し、多くの方が点火することに成功しました。

公開授業を終えて

今回の公開授業では、水田が大雨の被害を受けたほか、猪が水田に進入するなど、思いがけない出来事がありましたが、無事に終了することができました。

参加者からは「赤米はとても美味しいかったです。（小学生）」、「火おこしができてうれしかった（小学生）」、「とても面白く貴重な体験ができました（一般）」などの声が寄せられ、好評でした。来年度も埋蔵文化財資料館では、古代米づくりに挑戦します。どうぞご期待ください！

（田畠直彦）





光市東之庄神田遺跡出土の石棒

縄文時代には土器や石器など実用的な道具が多く用いられていました。しかし、それだけではなく、土偶のような呪術や祭祀的な儀礼に関連すると考えられる道具やプレスレットのような装身具も作られていました。今回ご紹介する石棒は、儀礼のための道具か、地位を示す道具だと考えられています。また、土偶のもつ女性性と対比して、石棒は男性性を示しているとも考えられています。

この石棒は60年ほど前、山口大学が島田川流域(光市)での発掘調査をおこなっていた際に、地元の方より寄贈されたと思われます。東日本での石棒の出土例は多いのですが、西日本ではかなり珍しい遺物です。本資料は、全長67.7cm、最大幅4.1cm、最大厚3.4cm、重さ1,595gの大型品です。このような丁寧に作られた大型品は近畿以西では珍しいので、遠く東のほうから運ばれてきたのかもしれません。石材の粘板岩は板状に割りやすい性質を持っており、また比較的柔らかいので加工しやすいという特徴があります。その反面、このような長い石材を手に入れるのはきっと難しかったでしょう。全体的にきれいに磨かれていますが、よく見ると加工した時のこすったような跡が筋状に残っているのがわかります。

はっきりとした出土地点はわかりませんが、報告書の記述によると光市にある東之庄神田遺跡の範囲内にあると思われます。おそらく縄文時代の集落がそこにあったのだろうと考えられます。出土地点の近くには横樋(よこび)遺跡という縄文時代後期の遺跡があります。この遺跡からは石錘が出土しており、海での漁撈活動がなされていたものと考えられます。ただ、海の幸ばかり食べていたというわけではないようです。ドングリの実(マテバシイ)も発見されていることから、陸上の野生植物も生活に重要であったことがわかります。縄文時代の人々は季節の移り変わりにしたがって野生の食料を上手に利用していたのでしょう。

この石棒を用いた縄文時代の人々も同様の生活を送っていたものと考えられます。この石棒は縄文時代後期から晩期にかけての時期に製作されたと考えられますので、両遺跡は同一の集落であったかもしれませんし、異なった時期に多少の移動をともなって集落が作られたのかもしれません。いずれにしても、繰り返し集落がつくられたのはこの地が縄文人の生活に適していたためであると考えられます。住む人が増え人口密度が高くなりますと、社会関係を維持するシステムが発達します。さらに、社会にまとまりを持たせるために儀礼がおこなわれるようになります。この周辺地域では土偶や装身具類は見つかっていませんが、石棒があることから今後それらの遺物が発見されるかもしれません。発見例が極めて少ない貴重な石棒が出土した東之庄神田遺跡は、人々が集まる拠点的な集落であった可能性があります。石棒などの道具を用いた儀礼によって、社会的なつながりが維持されていたのだろうと考えられます。

一体、この石棒はどのように使われていたのでしょうか。縄文時代の人々がどのような生活を送っていたのか、興味は尽きません。

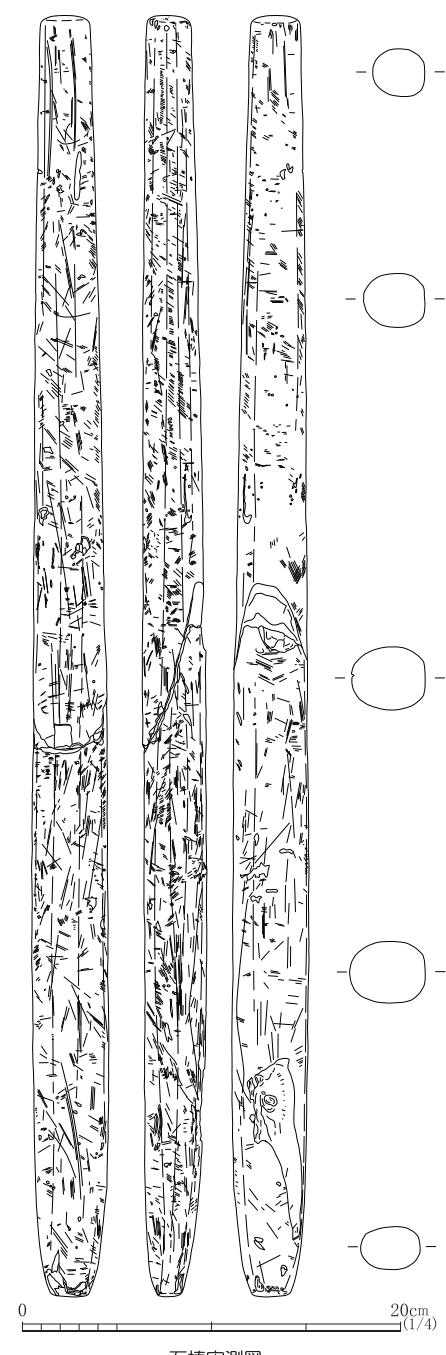
(川島尚宗)



石棒採取地周辺地図
『吳町廢寺発掘調査報告書』(山口大学人文学部考古学研究室 1987)
第2図「遺跡分布図」を転載・加筆



埋蔵文化財資料館所蔵の石棒



石棒実測図



内業のお仕事紹介 Vol.3

土器の接合・復元

皆さんはこれまでに学校の教科書や、資料館・博物館などで、きれいに復元された土器を何度かご覧になった事があるかと思います。当館でも様々な展示活動を行っていますが、そこでよく耳にするのが「どうやってバラバラの破片を接合するのか」「どうやってこの形に復元するのか」というご質問です。

このコーナーでは皆さんの疑問にお答えするべく、内業の作業の一つである、土器の接合から復元までの作業を詳しくお見せしていきます。



土器の接合 その3 蓋を接合する ~後編~



接合部分に接着剤を付け、破片同士をしっかりとくっつけたらピンチで挟んで固定、砂箱に立てる等の工夫をして、接合部分を安定させます。他の破片も同様にします。

続いて全体の接合です。(写真④、⑤) バラバラだった破片が一つになるので、更に土器の安定感が必要になります。全体のバランスを考え、今回は口縁を下にして接合します。口縁をくっつけたら、先に接合した部分を慎重に乗せくっつけます。



前回に引き続き、蓋の接合をします。
特別な道具は使いません。一般的な接着剤を使って破片をくっつけます。

では効率よく接合するために、どのように作業を進めたら良いでしょうか？まずは写真①をご覧ください。

この蓋の場合ですが、丸で囲った部分の接合から始めます。紙面の都合上、全ての作業をお見せ出来ないので、赤丸の部分の接合を取り上げます。(写真②、③)



ここまで、接合の流れを簡単に説明しましたが、重要な注意点があります。例えば接合部分に、ほんのわずかでもズレがあると、全体に歪みの影響が生じ、元の形とは程遠いものになってしまうばかりか、くっつくはずの破片が、くっつかなくなる事もあります。接合は基本的な作業ですが、埋蔵文化財保存修復の一端を担っているので、技術力や責任感が大切だと感じています。次回は土器の復元をご紹介します。

(乃美友香)

平成 25 年度 埋蔵文化財資料館の活動

4月 3/2 (土) ~ 4/25 日 (木)

平成 24 年度山口大学学術資産継承事業成果展

『宝山の一角』前期展開催 ※共催事業 入館者総数 524 名

4/24 (日) 大歳生き生きサロン (16 名) 団体見学・展示解説

5月 5/7 (火) ~ 6/28 (金)

平成 24 年度山口大学学術資産継承事業成果展

『宝山の一角』後期展開催 ※共催事業 入館者総数 523 名

5/18 (土) 『宝山の一角』後期展ミュージアムトーク開催

6月 6/3 (月) ~ 8/18 (火)

白石構内教育学部附属山口中学校武道場新営工事 (白石遺跡) に伴う
予備発掘調査を実施

6/15 (月) 第 13 回公開授業

『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう 7－』

第 1 回授業 (田植え・藁ない) 開催 参加者 23 名

6/22 (土) 立命館大学考古学研究室 (25 名) 団体見学 (展示・構内遺跡)

6/29 (火) キャンパスでくつツアによる展示団体見学 (約 150 名)



公開授業第 1 回授業 縄ない



6月 29 日開催キャンパスでくつツアによる展示団体見学

7月 7/3 (水) ~ 5 日 9 (金) ~ 17 日 (水) ~ 19 日 (金)

理学部学生 (9 名) 博物館実務実習受け入れ

7/16 (火) ~ 10/18 (金)

第 35 回企画展『山口大学の原風景 2 地方豪族と官衙の出現』開催

入館者総数 701 名

7/20 (土) 第 13 回公開授業

『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう 7－』

第 2 回授業 (稻の観察・土器づくり) 開催 参加者 20 名

7/24 (水) ~ 25 (木) 見島ジーコンボ古墳群第 137 号墳測量



見島ジーコンボ古墳群第 137 号墳現地調査

8月 8/3 (土) 吉田地区オープンキャンパスのため臨時開館 (入館者 330 名)

8/5 (金) ~ 10 月 7 日 (月)

吉田構内獣医学国際教育研究センター新営工事 (吉田遺跡) に伴う

本発掘調査を実施



「勾玉づくり」ワークショップ

9月 9/18 (水) ~ 25 日 (水) 山口市教育委員会職場体験にて中学生が発掘調査現場を見学

10月 10/10 (木) ~ 12 月 27 日 (金)

吉田構内第 1 武道場耐震改修その他工事 (吉田遺跡) に伴う本発掘調査を実施

10/12 (土) キャンパスでくつツアによる展示団体見学 (28 名)

10/20 (日) 第 13 回公開授業

『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう 7－』

第 3 回授業 (稻の収穫・土器焼成) 開催 参加者 16 名

11月 11/3 (日) ~ 1/31 (金)

山口県大学 ML 連携特別展参加企画『博物館が繋ぐもの～遺跡を未来へ～』

開催 入館者総数 304 名

11/3 (日) 総合図書館にてワークショップ「勾玉づくり」を開催 参加者 50 名

11/16 (日) 第 13 回公開授業

『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう 7－』

第 4 回授業 (脱穀・赤米の試食) 開催 参加者 21 名

11/23 (金) ホームカミングデー・ミュージアムトークのため臨時開館 (入館者 34 名)

12月

1月 1/29 (水) ~ 2/7 (金) 萩博物館所蔵見島ジーコンボ古墳群第 137 号墳出土資料調査

2月

3月 3/1 (土) ~ 4/24 日 (木)

第 2 回山口大学学術資産継承事業成果展『宝山の一角』

前期展開催 ※共催事業



山口県 ML 連携特別展でのミュージアムトーク

編集・発行

山口大学埋蔵文化財資料館

〒753-8511 山口県山口市吉田 1677-1

【Tel/Fax】083-933-5035

【E-mail】yuam@yamaguchi-u.ac.jp

【HP】http://yuam.oai.yamaguchi-u.ac.jp

発行年月日 2014. 3. 31.

季刊山口大学埋蔵文化財資料館通信

第 24 号

『てらこや埋文』2014 春号